特232
35

苦難の理解

小野村林藏著

札幌パンフレット

II

東京
長崎書店刊行

始

特232
35

帝國圖書館藏

苦難の理解

小野村林藏著

（改訂版）

札幌パンフレット Ⅱ

東京 長崎書店刊行

昭和七・九・一・文・内・交・帝國圖書館

苦難の理解　目次

苦難の理解……六
文ちやんのお母さんへ……一四
病床の友へ……四〇

344-163.

苦難の理解

苦難の理解

一

舊約聖書の創世記を見ると、アダムとエバとが禁斷の木の實を喰べてエデンの園を逐はれる時に、神はエバに『我大に汝の懷姙の苦惱を增すべし。汝は苦みて子を產まん』と宣給ひ、またアダムには『汝は面に汗してパンを食ひ終に土に歸らん』と宣給うたとある。人生の現實が、苦痛に富んでゐることは、原始時代の人類にも痛切に感ぜられたことが知られる。佛教徒が「此の娑婆世界は是れ惡業の所感、衆苦の本源なり。生老病死輪轉して際無し。三界の獄縛一つも樂しむべきこと無し」といつてゐるのは、印度人の厭世思想を直傳したもので、もとより極端な見かたではあるが、併し人世が涙の谷であることだけは

否み難い事實である。『わが國はこの世のものならず』と宣給うて現實の世界の物質的幸福を離れて、人心の奥處に靈の國を建設することを、救世の大方針となし給うたイエスが、心に溢るゝ愛心の止むに止まれぬ衝動から、心ならずも傳道の本領を離れて、僅かに三年に足らなんだ短い傳道の期間の、しかも其の大部分を、病者の救護に捧げ給うたのも、人世の苦痛の現實を痛感し給うた餘りに出たものである。

若し神が愛であり、此の世界がその愛の神によつて創造され、また經營されつゝあるものなら、何故此の世界に苦痛が存在するのであらうか。是れ神の愛の矛盾ではないか。此の世に苦痛の存在する限り、神は愛であるといふ信仰は、疑ふべきものではあるまいか。斯ういふ疑問は何人にも容易に起る所である。

併し果して人生の苦痛は神の愛を裏切るものであらうか。親や教師が子弟に

加へる鞭は、彼等の愛を裏切るものではあるまい。私は人生の苦痛の、必ずしも神の愛と相容れないものではないことを、少しく玆に說いてみたいと思ふのである。

二

此の世界に苦痛といふものゝ存在することを、痛ましう感ずる我等の心は、世の中の色々と込み入つた、複雜な組織の中から、とかく苦痛だけを引き拔いて來て、それを眺めやうとする。そしてそれが世の中の他の事柄と、如何いふ關係を持つてゐるかといふ點を考へることを等閑にする。併しそれは誤である。人間は眼と耳とを、何れも二つづゝ與へられてゐる。若し眼が一つであつたなら、物の遠近の識別が困難になり、耳が一つであつたなら、聞えて來る音響の方向が分らなくなる。二つの眼の映像、二つの耳の音響を、互に對照した時に、初めて遠近の識別が正確になり、音響の方向が明白になる。世の中のこ

とも多くは其の通りで、物事を判斷する場合に、對照的に見なければ眞相を得ることが出來ない場合が多いのである。

本來苦痛といふものは、心の發達に比例して增加して來るものである。我等にはとかく自己を以て他を測らうとする傾向がある。自分に苦痛な事は他にも苦痛であり、自分に愉快な事は他にも愉快であるやうに思ふ。此の推測は或程度までは的中するが、人の性格や趣味は、容貌と同樣で千差萬別であるから、往々飛んだ間違を生ずる。ましてや我等人間とは似ても似つかぬ他の生物の心を——若し假りに彼等は心と稱し得るものがあるとするなら——我等の心から類推的に推測することは甚だしく誤つてゐる。例へば犬や猫が死を遁れようとして、蹠き鬪うてゐる有樣を見て、彼等もまた我等と同じやうな、痛切な生に對する執着と、死に對する恐怖とから、悶え苦んでゐるやうに思ふなら、人情としては無理もないが、事實の上からは誤解である。無論彼等が死に抵抗して

蹠いてゐるのは事實である。併し彼等みづからは果して死そのものを知つてゐるだらうか。況んや死の恐怖といふやうなものを感じてゐるだらうか。事實は彼等の存續を保護しようとする神秘な力が、彼等の裏に本能となつて現れて、衝動的に彼等を死に抵抗させてゐるのである。無論彼等に苦痛が全然ないのではない。朧ながらにも意識のある彼等である。死の恐怖と生理的苦痛の豫覺とがあると見るのが正當であらう。併しそれは極めて低級なものでなければならぬ。我等のやうに發達した心を持つて居らぬ彼等に、我等と同樣の苦痛を感じ得る道理はない。同一理に於て、小兒よりも大人に、蠻人よりも文明人に、苦痛の多いことは疑ふべくもない。

人の感覺が鋭敏になり、物に感ずる度合が強くなり勝る程、苦痛の感はいや勝つて來る。ましてや心の發達の結果は、肉體的苦痛の外に精神的苦痛といふ更により深い苦痛を感ずるやうになつて來て、それが心の發達に並行して倍々

强められて來た。今や人間はその發達した心を抱へて、それに伴ふ課税ともいふべき苦痛の爲めに困惑してゐる有樣である。併し斯うした苦痛は光榮ある苦痛ではあるまいか。祝福ある苦痛ではあるまいか。多額の納税は苦痛であらう。だが納税の義務のない貧困者と納税の義務のある富者と、何れがより多く祝福された者であらうか。

聖高な人格に燃えるやうな憧憬を感じ得る心、秀逸な繪畫や、彫刻や、或は美妙な音樂に恍惚となり得る心、偉大な戯曲に深くも共鳴し得る心、深遠な眞理を會得し得る心、美はしい愛に醉ひ得る心、斯くも感受性の磨かれた心が、また當然の理として苦痛にも感受性の鋭くなることは洵に止むを得ないのである。生活の內容が高くなり、豐富になるに從つて、苦痛は深くなるものである。我等は徒らに苦痛を厭うて、眞珠の美を解し得ない豚の幸福を羨むべきでない。

三

苦痛は精神の發達につれて生じて來たものであることは、前述の如くである。併しまた一方から見るなら、人世の苦痛の大部分は、人間みづからが招きつゝあるものであることも、考へねばならぬのである。

犬や猫には意志の自由といふものがない。彼等が人に吠えるのも、魚を銜へて走るのも、唯だ本能の衝動によるので、何等思慮や判斷を廻らした結果ではないのである。然るに人間には思慮、判斷の力がある。物事の是非、善惡を考へて、其の何れを取り、何れを捨てるべきかを辨別すると共に、自己の判斷に從つて、自由に進退することの出來る力が與へられてある。これはあらゆる生物の中で、人間のみが專有する特權である。此の力があればこそ人間は道德的に價値ある者であり得るのである。馬車馬が馭者の手綱さばきに從つて、右に左に動いて行くやうに、生物が本能といふ馭者に驅り立てられて動いてゐる間

は、動作に道德上の責任が無い代り、また道德的の價値もない。精神生活が結ぶ尊貴な實である崇高な品性や、偉大な人格を、人世に於て見ることの出來る喜びは、此の本能以上に超出した力、卽ち意志の自由が人間に與へられてあることに基づく。

併し凡て强い光は濃い影を約束し、巨大な物體は廣い影を伴うてゐる。人間が取捨選擇の力を與へられてゐる一面には、種々の危險が伴うてゐることも、洵に止むを得ないのである。是れを先づ手近い物質的な事に例を求めてみると生物の中で最も病氣の多いのは人間である。犬や猫にはめつたに病氣は起らない。然るに人間は自ら稱して病の器といつてゐる。之れには種々の原因もあらうが、その多くの原因の中で最も重大なものは、慥かに人間にのみ與へられてゐる此の「意志の自由」の亂用にある。もし人間が酒精の濫用や、淺ましい荒淫をもつと愼んだなら、或は上流徒食の輩がその懶惰な生活を少しくみづから

矯正したなら、或は資本家が利己一片の貪婪を制へて、勞働者の過度の勤勞を己が身に感ずる事が出來たなら、人間の社會は未然の中に如何に多くの疾病から脱れることが出來たらう。もしそれ正義公道が正しく守られ、慈悲仁愛が遍く行はるゝを得たなら、人世の苦痛の大部分は、是れを拭ひ去ることが出來たであらうことは、何人も疑ひ得ない所であらう。我等は人世の苦痛を見て神の愛を疑ふ前に、先づ自己を反省すべきである。己れが播いた所はまた己れが刈らねばならぬ所である。人間が己れの播いた種子を忘れて、その刈る所を恨む理由はさらさら無い筈である。

四

もつとも世の中には、自分が直接に播いた所で無いものを刈らねばならぬ羽目に落ちてゐる、洵に同情すべき人々が多くある。人世は一個の大きな有機體の様なもので、社會の單位を爲してゐる御互はその細胞に相當してゐる。人體

中の或る細胞が病に侵されるなら、他の細胞全體に影響が來て、總てが共に惱むやうに、社會の一部に犯された罪惡は、社會全體に惡果を及ぼす。家内に一人に病人があることが、家族全體に何んなに種々雜多な苦しい影響を及ぼすものであるかを實驗した人々には、此の事實は明白である。昔から「親の因果が子に報い」といふ。併し一人の罪惡の報はその子孫にばかりに止まるものではなくて、社會全體に及ぶものである。

斯く己れの罪ならざる罪の爲に惱み苦しむといふ事は、一見甚だ不合理で、罪なき者にとつては、迷惑千萬のやうであるが、併しそれは惡い方面からばかり見たのであつて、此の有機的關係を善い方の側から見ると、此の法則は社會の進歩、人間の向上の爲に必須の要件となつてゐるのである。

今日の進歩した文化は、我等の祖先が代々傳へて呉れた幾多の貴重な經驗の賜物である。彼等が多くの苦痛を嘗め、多くの辛酸を味つて、或は實驗し、或

は發明した所を、次第に繼承することが出來たればこそ、我等は祖先の夢にも想像し得なんだ文化を樂しむことが出來るやうに成つた。しかも此の文化の傳承は我等と祖先との間に、有機的關係があることによつて出來たのである。若し此の社會の各人に有機的關係がなく、人々が全く孤立の狀態にあつたなら、他人の惡果に煩はされることは無かつたらうが、其の代りに我等の祖先の、是れらの貴重な遺産を傳承する手段も無かつたらう。世には良き遺傳もあれば良き感化、良き影響もある、偶々有機的關係が齎す惡果のみを見て、それを迷惑がるのは、誤解でなければ得手勝手である。

五

若し火傷が苦痛なものでなかつたら、今日迄にどのくらい多くの人が火で燒け死んだであらうか。「若し火傷が愉快な感覺を與へるものであつたら、おそらく人類は、遠くの昔に火の爲めに全滅して了つてゐたらう」と、或る進化論

者がいつてゐる。當だに火傷の苦痛のみでない、一切の生理的苦痛は、生物の生命の保護の爲めに重大な役割を演じつゝあるものである。發熱、疼痛、痙攣等の發作は、苦痛ではあるが、我等にとつては、病根の潜在を警告する忠良な警手である。若し之れらの報告が無かつたなら、身體に病毒の侵入したことを知るすべが無くなり、醫師は治療の手懸を殆ど失つて了ふであらう。

是れは極めて消極的な方面から苦痛の效果の一端を指摘したのであるが、苦痛は單に生命の消極的保護に役立つばかりでない。生命の積極的發展、卽ち人類の文明の向上の爲めにも重要な役目を持つてゐる。私は親しい友人である海軍大佐のA君から、曾て斯んな笑ひ話を聞いたことがある。A君が兵學校を卒業した時のことである。候補生一同は時の練習艦金剛(初代の金剛)に乘つて南洋諸島を巡航した。艦が或る島に碇泊すると、赤裸の土人の群が獨木舟にバナナを山のやうに積んでやつて來て、手眞似で物々交換を爲て呉れろといふ。そ

の頃は未だなか〳〵内地では斯んな物を喰べることは出來なんだから、乘組員一同は珍しがつて、我も我もと小刀、手布、洋盃、ボタンといつたやうな品物を持ち出して、てんでにうんと買ひ込んだ。ところがそれから二三日航海を續けてゐると、何分赤道直下の太陽に蒸されてゐることであるから、初めは青かつたバナナが一度にむれて黄色くなつた。さあ早く喰べんと腐つて了ふ。ところが山のやうに買ひ込んだのだから、いくら豪傑連の寄合でも、さうたやすくは平げ切れない。誰も彼もむしや〳〵と朝から晩まで頰張つてゐるがなか〳〵片付きさうもない。はては上官の默許を得て、甲板で當直してゐる連中迄がむしや〳〵やつてゐる。上は將校連から、下は厨夫に至る迄、バナナが喉に支へてげぶ〳〵苦しんでゐるといふ始末で、いやはや飛んだバナナ攻めに會つて閉口したといふ珍談である。また同大佐は此の航海中に土人の常食にする、かの「麵麭の木」(ブレッドフルートツリー)の實を喰べてみたさうで、淡く火に燒いて喰べると殆どパンと變

らない味がするとのことである。彼等土人は飢ゑれば之等の木の實を喰ひ、滿腹すれば椰子の樹影で惰眠に耽る。太陽の熱が強いから身に衣を纏ふ要もなく悠々として無爲に生涯を徒消してゐる。「あんな國に生れたらのんきですなあ」といつて大佐は哄笑した。さうだ、そんな國に生れたら、屹度のんきに相違ない。併し其の代りに彼等には我等の持つてゐるやうな、此の盛大な文化は無いのである。

若し人世に飢餓と寒氣との苦痛が無かつたら、我等の有してゐる物質文明は、其の發達の根本刺戟を失つて了つたらう。パンと衣とを求めようとする努力から、今日のあらゆる經濟組織は發達して來た。二十世紀の物質文明が所有してゐる一切の驚異は、それが無線電信であらうが、はたかの美はしいゴブラン織や、壯大眼を驚かす摩天樓であらうが、其の發達の最初の萠芽は、實にアダムが腰に纏つた無花果の葉と、手に持つた鋤とにあつたのである。飢餓と寒氣と

の、苦痛を理解しない南洋土人の間からは、無線電信もゴブラン織も決して現はれては來なかつた。

物質文明の發達に苦痛が必要であつたやうに、人間精神の發達にも、また苦痛が必要であつた。

基督教會ではイエスのことを「悲哀の人」と呼んでゐる。傳說によると其の生れ給うた場所はユダヤの寒村ベテレヘムの旅舍の馬小屋の中であつた。父はナザレ村の貧しい木匠で、しかも世を早く去つたから、年若いイエスは老母と多くの弟妹とを、身一つで扶養せねばならなんだ。從つて彼は「額に汗してパンを食ふ」といふ言が何を意味してゐるかを、最もよく理解し給うた。げに貧は彼の親しい友であつた。イエスが我等に極めて近く、彼の心と我等の心との間には、泌み〳〵とした情感の交流が相通うて、我等の爲めに、悲しめる時の最も近い親友であることも、實に彼が涙の人であつたことに、深い理由が潛ん

でゐるのである。

富貴顯要の家に生れ、希うて成らざるなく、望んで達せられざるなき榮耀榮華の裡に生長した、氣隨、氣儘な貴公子は、人として何程の價値を備へてゐやうぞ。貪慾な卑劣漢なら、利益の爲めに或は諂ひの笑を呈するであらうが、如何に幼稚な事大主義者でも、自己の眞實な悲哀を慰められやうと思つて、彼の友情を求めはすまい。唯だ悲哀を知れる心のみが、悲しむものを慰め得る。唯だ苦痛に打ち勝つた心のみが、弱き者を勵まし得る。「戀せずば人に心もなからまし」戀愛の苦痛を知つた者にして、初めて男女の心がわかる。深き心、高き心、聖き心にして、未だかつて苦痛に養はれないものはない。

我等が同情と譯してゐる英語の sympathy といふ文字は語源をギリシヤ語に發して sym は sun から pathy は pathos から來てゐる。sun は「共に」、pathos は「苦しみ」といふ意味である。sympathy とは苦しみを共にするといふ義で

ある。卽ち、同情は同じ苦しみを分ちあふ所から生じて來るものであることを示してゐるのである。味ふべきではないか。此の荒凉たる人生の荒野に、人情の美花が咲き出る爲めには、涙の潤ひが必要なのである。若し人生に悲哀といふものが無かつたら、ダンテの神曲も、ミケランジェロの彫刻も、ベートーヴェンの音樂も、ミレーの繪畫も、遂に生れなかつたらう。過去數千年の間に、人間の生み得た最も良きものにして、其の根柢を悲哀の泉に潤はされてゐないものは無いのである。

六

基督敎は世界を神の工場と觀る。此處に心は彫まれ磨かれて、次第に聖く高くせられる。大理石の塊から天の使が彫み出される迄には、如何に多くの鐵槌が、打ち下されねばならぬかを思へば、愛の神の世界にも、苦しみのあり得る道理は知られやう。苦痛は發達した心に伴ふ陰である。意志の自由の濫用を戒

める鞭である。そしてまた深き、高き人格を彫み出さうとする鐵槌である。

私は曾て信州の淺間山に登つたことがある。山腹の小屋で一夜を過して、拂曉に絕頂に攀ぢ登ると、下界は密雲に閉ざされてゐる。眼界の限は唯漠々たる雲の海である。彼方此方に、島の樣に頂だけが浮き出てゐるのは、甲武信、立科、八ヶ嶽、さては妙高、乘鞍であらう。身は塵界を超越して、雲上高く夢心地で立つてゐた。すると忽ち東天に紅の潮がさして、一閃の光明が輝くと見るや雲を蹴つて、堂々と日輪が現れた。其の刹那、百千の金箭はさつと雲を射て、いままで暗澹とした雲の海が、忽ち五彩の寶帳と變じた。視よ、脚下は光明に波打つてゐる！——併し下界の人にとつては世界はなほ陰鬱な曇天に被はれてゐることだらう。懷疑の谷の底に立つてゐる者にとつては暗澹たる黑雲も、信仰の山頂に立つて天上の光明に照されて見れば、燦爛たる五彩の瑞雲であり得る。我等が人生の心痛を見る眼も、また其の如くではあるまいか。

文ちやんのお母さんへ

一

御手紙難有う存じました。文ちやんが疫痢で喪くなられたといふ通知を初めてY氏から受取りました時は、どきんと胸を突かれたやうで、その日一日何んだか固いものが鳩尾のとこのに支へてゐるやうな心持がしました。可愛い盛りで、しかも一人しかお持ちにならぬ愛兒を、突然急病で喪はれた貴女のお心持が思ひやられます。先年私共の洋子が、同じ病氣を致しました時の心持を思ひ出さずに居れません。ひたすらに御同情致します。

私の親しい友人の一人が、その愛兒の葬式の日に、「僕には未だ此の意味が悟れない」と、深い苦痛の色を顏に浮かべて言ひました。彼は牧師でありました。

併し愛兒の死といふ痛烈な問題にぶつかつて、切羽詰つた心は、愛する者が「何故斯くも短命で世を去らねばならなんだか」といふ問題を、靜かに想ひ回らすには、餘りに餘裕が無かつたのです。私は彼の心持に同情しました。私は「生者必滅、會者定離」と觀念して、氷のやうなあきらめに落着かうとする態度には同意するに堪へません。我等は人間であります。絶望から來る消極的なあきらめに、心情の花を引搖つて、死灰のやうな心になるのは、餘りに不自然であると思ひます。イエスは青年ラザロの死を傷んで、涙を流し給ひました。愛する者の爲めに流す涙こそは、逝ける者に捧げ得る、我等の最高の贈物であります。私は貴女の涙を卑怯とも、未練とも思ひません。ましてや不信の徵とはなほさら以て思ひません。お泣きなさい。文ちやんの爲めに泣いてあげなさい。それが親の心であります。また人情の至純なるものであります。

さもあれ今こそは貴女にとつて最も信仰に生きねばならぬ時であります。深

い悲しみの時こそは我等の最も神を要する時であり、また最も神に近い時であります。私は貴女が、今出會つて居られる斯の深い悲哀の時に、人間の言葉が何れだけの光明を齎すことが出來るだらうかを疑ひます。しかし私は貴女の信仰の友として、私の信ずるところを申しあげ、及ばずながら御奬勵をせずには居れません。

二

生れ落ちて四年、次第に親といふものを知り、その小さい心が親の愛に感應するやうになり初めて來た時、親子恩愛の情の花が、將に美しく咲き初めた時、文ちやんは逝かれたのです。五十年、六十年の生を保つべき筈を、僅かに其の十分の一にも足らぬ歳月で死んでしまはれた。その生涯は未完成であつた。そしてそれが齎したところは、啻だ兩親の心に與へた深い痛手であつた。若し斯ういふやうに考へるなら、あの可愛い文ちやんは生れて來られなんだ方が宜か

つたのではあるまいか。母の顏を覗いたその輝く眼も、乳房を摑んだその紅葉のやうな手も、始めから無かつた方が宜かつたのではあるまいか。否、私はさうは思ひません。斷乎としてさうは思ひません。やはり文ちやんは生れて來られた方が宜かつたのです。

私は先づ考へたい、文ちやんの四歳の死は果して眞の意味に於て早世であり、從つてその生涯は未完成であつたでせうかを。

人間の願望は無限に擴がつて行きます。宇宙の萬物は永劫の進化を續けつゝあります。此のやうな世界に、嚴密な意味に於ての完成といふものがあり得るでせうか。我等は容易に完成といふ言葉を用ひます。併しそれは眞實ではありません。永劫の過去から今日迄、此の世界には眞の「完成」なるものは無かつたのです。從つて四年の生涯を「未完成」と觀、六十年の生涯を「完成」と觀るのは淺墓な、早まつた考です。併しまた私は此の世界に、或る意味の完成か

あることを信じます。私は嘗てレオナルド・ダ・ヴィンチのスケッチを集めた本を見たことがあります。私と一しよにそれを見つゝあつた一畫家は、女の首や、男の手や、首も手足も無い胴體やを、亂雜に畫き散らした一ページ、一ページに深い注意を拂ひながら、頻りに感歎を洩してゐました。一寸見るなら全然形も統一もない手や首の斷片的素描も、偉大な天才の力が籠れば、手は手、首は首としての一種の完成が生ずるのです。下手な彫刻家の手に成つた全身像よりも、名匠ロダンの彫つた一本の腕に、却つて眞の完成はありませう。此の醜惡な人生に生れて、何等その穢に染むところなく、虚僞も、嫉妬も、怨恨も知らず、花のやうに美しく、小鳥のやうに無邪氣であつた文ちやんは、その清らかさ、美くしさを少しも損はれずに此の世を去つて行かれたのです。地上四年の文ちやんの生涯を、六十年の醜惡に滿ちた世上一般の人々の生涯に較べ、果して何づれが完成したものでせうか。私は人間の生涯が、時間に於て短かかつた

ことを容易に悲しんではならぬと思ふ者であります。

三

私は今、文ちやんの生涯は小さい完成だと言ひました。併しそれは單に美くしい、清いものであつたといふだけの意味での完成に止まるだけで、もつと積極的な、意義や價値は無かつたでせうか。よしそれが如何に小さい生命であつたにしても、我等の愛する者の生涯が、此の天地、人生にとつて何等積極的に意義も價値も無かつたといふやうな、冷めたい寂しい觀念には、私はとても堪へられません。況んや文ちやんの母である貴女にとつては、文ちやんの生涯に意義を認め得るか得ぬかの問題は、劃切な重大事であらねばならぬと思ひます。

私の眼は朧であります。併し私は文ちやんの生涯が、時間的にはよし小さいものであつたにしても、此の世に帶びて來られた貴い使命があつたことを、明かに觀る者です。

考へてごらんなさい。貴女は文ちやんを得て、初めて親心といふものを經驗されました。人間が親心といふ、愛の生活の最も意味深い事實を、實驗することによつて、心の生活に新しい、貴い天地を打開されるといふことは、小さいことでせうか。此の輕薄な、虚僞と利己とに滿ちた人生に於て、眞に穢れないものは親心であります。貴女の持つて居られる、あらゆる知識や、才能も、貴女の胸に文ちやんによつて開かれた愛の泉に較べるなら、何程の價値があるでせうか。思へば文ちやんが生れて來られたといふことは、貴女の心の成長の爲めに何れだけ貴い結果を齎したでせう。貴女が四年間文ちやんを孚くみ愛しまれた、その經驗によつて、貴女は眞に小兒を理解し、またそれを愛し得る力を得られた筈であります。その貴い理解と愛とが、將來貴女と廻り會ふべく、見えざる攝理の絲で結ばれた此の世の幾多の小兒にとつて、何れだけの祝福でありませうか。

更にまた、人生には血と涙とを以てのみ學び得る學問があります。貴女は今にして初めて、此の世の愚かな人々が、何物よりも貴しとしてゐる富や、名譽や、知識が、一愛兒の魂に較べては實に取るに足らぬものであることを、痛切に會得された事と思ひます。是れは貴い發見であります。

私の知人であつた一醫學士が死にました時に、その老母が棺の中に一冊の聖書を納めながら、「悴は澤山の本を持つて居ますが、今となつては彼の爲めに役立つものは此の聖書だけで御座います」と涙をぽろ〳〵こぼしながら申されました。若し文ちやんの死が、貴女及び御家族がたに、此の嚴肅な眞理を敎へ得たとするなら、それは小さいことでは無いと思ひます。

死は此の現金な、物質の臭の烈しい俗惡な世界から、靜かな、深い心の世界に、人の心を導く警鐘です。私は信じます。文ちやんの死は貴女の心を導いて、物質以上の世界に、何のくらゐ高く登らせたことでせう。イエスによつて約束

された神の國は、文ちやんの小さい魂が緣の綱となつて、今や貴女にとつて懷かしい、親しい、かつ極めて近いものになりました。

私は信じます。文ちやんの小さい生涯は、貴女に愛の敎育をする爲め、また貴女を神の國に結びつける爲めでした。お祈りなさい。祈り心を以て靜かに私の言ふ所を考へて下さい。貴女は私の言に眞理を發見して下さることが出來る筈です。

四

世の中では普通に、短命であつたことは、取も直さず不幸であつたことに考へられてゐるやうです。併し短命といふことは、さほど不幸なことでせうか。いさゝか極端な例ですが、世の中には監獄の中で六十歲、七十歲の齡を重ねてゐる者があります。極惡人と忌み嫌はれながら百年の齡を保つたとて、それが何の幸福でせう。人生の幸、不幸に、生命の長短が無關係であるとは思ひませんが、普通に考へられてゐる程に根本的な要素であるとは思へません。

なるほど文ちやんは短命でした。併し人生の悲哀や慘苦を露ほども知らず、その醜惡に毫末も穢されず、兩親の愛を一身に集めて、その愛に包まれて生き、その愛に包まれて世を去られました。長命な樫と、短命な百合と、何れが幸福であらうかは、容易に決し難い問題です。誰が輕々に樫は百合よりも幸福だと斷定することが出來ませうか。

況んや人間の魂は、地上の生涯だけで滅亡してしまふものでありません。是れ我等基督者の信仰であります。

唯物論者は、人間は一塊の物質に過ぎない、それ以外の何物でもあり得ない、と言ひます。私は今、愛兒の死といふ痛烈な人生の活問題に惱んで居られる貴女に對して、空疎な、理窟めいたことを言ふことを遠慮したいと思ひます。唯だ一言申したいことは、私の親愛する父母や妻子や友人の心情が、路傍の石や

瓦の變形で、それ以外の何物でも無いといふやうな思想には、私の全人格が燃えるやうな反抗を感ずることであります。私は斷乎として確信します、魂は物質以上であることを。從つて私は、文ちやんが今なほ見えざる世界で、あの可愛いゝほゝ笑みを續けてゐられることを鮮かに信ずる者です。

前年私は、膽振の山間の或る小さな溫泉場に數日間滯在したことがあります。その時のことでした。蝦夷松や白樺の處女林を潛つて、附近の小さな火口湖らしい湖に遊んだことがあります。古鏡を沈めたやうに靜かな湖面を眺めながら、太古のまゝの寂寞に包まれつゝ、私は汀を歩いてゐました。人間の手に穢されない、原始のまゝの森と水とは、エデンの園のアダムとエバとが感じたであらうやうな、神祕な威壓を心に與へます。私は宇宙の深い〳〵底に立つたやうな心持をしながら、じつと四邊を眺めてゐました。その時に、ふと一疋の異樣な蟲が、水の中から這ひ出すのが眼につきました。近よつて能く見ますと、

それは蜻蛉の幼蟲で、俗にたいこむしといふものでした。私は異樣な感動を感じました。今しも此の一點の生命は、天地の神祕力に誘導されて、水の世界から空氣の世界へ、その神祕な移動を爲しつゝあるのです。私は靜かに考へました。人間の死とは畢竟此のたいこ蟲が水中から空中へ移る過程と同樣のものに過ぎないのであるまいかと。水の世界では今や彼の友達である魚や蟲の群が、彼の死を悲しんで、弔歌を唱つてゐることでせう。しかも何んぞはからん、それは彼にとつては、清い空氣と、美しい日光とに滿ちた世界に、自由に飛翔し得る新生命の發端であつたのです。

入りぬとや東に人は惜むらん都に出づる山の端の月

我等も何時かは此の世を去つて、光の御國に移り住むべき者であります。今は其處にあるべき私の愛する者らと相會うて、默示錄記者の謂ゆる「新しき歌」を唱ふことこそ、私の心に深くも祕めた懷かしい幻です。貴女と文ちやんとの

別離は、決して永久ではありません。聖書は正しくさう敎へてゐます。私はそれを信ずる者であります。

五

最後にもう一言貴女に申したいことがあります。貴女は文ちやんを、絶對に自分のものであると考へては居られないでせうか。若しさうなら、それは生みの母である貴女として、洵に無理の無いことです。併し眞實文ちやんは貴女のものでありませうか。なるほど貴女は文ちやんをお產みになりました。そして四年の間を心魂を打ち込んでお育てになりました。文ちやんの血と肉とは文字通り貴女の血肉から出たものです。貴女が文ちやんを抱きしめて、自分のものぢやと言はれるのは、情に於てもつとも至極のことです。併し私は貴女にお尋ねせねばなりません。貴女は文ちやんの創造主でせうかと。貴女は文ちやんの母でした。併し文ちやんの創造者ではありますまい。貴女は文ちやんが產聲を

上げられるまでは、それが男兒か女兒かさへ知つて居られなかつたのです。文ちやんといふ生命を貴女の胎內に宿したのも、貴女の乳房に溢るゝ乳を備へたのも、見えざる神の御業であります。貴女は文ちやんの創造者なる神を考へねばなりません。文ちやんが貴女のものであるよりも、もつと眞實の意味に於て文ちやんは神のものなのです。貴女が文ちやんの母となられたといふことは、神が文ちやんを貴女にお預けになつたといふことに他ならないのです。人間が「人間」を何うして絶對に所有することが出來ませう。眞に人間を所有し得るものは宇宙間たゞ神があるのみです。

斯う言つただけでは、文ちやんが、絶對的には、貴女のものでないといふことに御得心が行きかねるかも知れませんが、考へて御覽なさい、若し文ちやんが男兒であつたなら、他日日本國に事のある時、國家は貴女の同意の有る無しに拘らず、之れを强ひて貴女の手から奪ひ取つて、戰場に連れて行つてしまふ

でせう。地上の社會組織に於てゞさへ、子は絶對に親の所有で無いではありませんか。

子は親のものである、といふ觀念は、人情洵に無理の無いことではありますが、眞理であるとは申されません。私は貴女におすゝめします、貴女は文ちやんを見るのに之れを貴女のものとして見ずに、神から預けられた貴い寶として御覽になることを。さうして文ちやんの喪くなられた今は、神から附託されてゐた、その貴い寶を、神の召しによつて、再び神の御手に返納したので、今や神はこれを愛の御手に受けて、愛しみ孚み給ひつゝあるとお考へになることを。之れは情に於ては困難かも知れません。併し信によつて克つて下さい。

私は文ちやんの小さい生涯を思ふ時、妙に夕づゝを聯想します。それは小さい光です。併し東方の博士たちをイエスに導いたものは太陽や月ではなくて、

小さい星の光でした。願くは文ちやんの姿が、あの小さい、併しながら清く美しい星の光のやうに、貴女の心をイエスに彌や近く導かんことを。

私は此の手紙をテニスンのインメモリアム中の一句を以て結びたいと思ひます。

愛して愛を失ふは、
愛せしことなきに勝る

北海道にはもう冬の寂寞が襲うて來ました。石狩の平野は次第にうら枯れて行きます。吳々も御身大切に。

病床の友へ

M君

一

北海道の秋は今が最中です。昨日も三四の學生と、豐平川の岸に添うて、眞駒内の附近まで散歩しました。ぐら〳〵する石を危なく踏みながら、それでも靴を濡さずに、中洲に渡つてみたりしました。雜木の繁つた中洲は、水聲に包まれながらも、流石に靜かでした。はら〳〵と、時々思ひ出したやうに散る黃葉や紅葉に、秋の寂しさが身に泌みます。樹の間を透して見る對岸には、波長の長い、おだやかな丘陵が、地平線の續く限りに擴がつて、遙か上流に重なつて聳えてゐる。國境の連山には既に雪が來てゐます。何を聽くともなく耳を傾

けてゐると、微かに木の葉の搖れる音がして、ちち〳〵と小鳥が何處かでしば鳴いてゐます。「ツルゲネフの小說に見る景色のやうだ」と一人が言ひました。手稻の峰に湧く、秋雨を含んだ雨雲が、時々河原を掠めては、ぱら〳〵と中洲の雜木林を叩いてすうつと彼方に流れてゆきます。斯うして北海道の秋は晩れてゆくのです。

途中の林檎畑で買つた林檎を、皮なりで嚙つたり、「藻岩原始林境界」と書いた標柱を、殊更どま聲を出して讀んでみたり、笑談を言つて笑つたり、たゞも う小供のやうになつて歩き廻りました。併し同行の一人々々を見てみると、何れも相當に問題を持つてゐるのです。健康の不安に脅かされてゐる者、家庭の問題で苦しんでゐる者、心にかくれた痛手を包んでゐる者、一人として苦しんでゐない者は無いのです。

東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる

私は皆と一しょに笑ひながらも、心では啄木のことなどを思ひ浮べて、秋の寂しさを泌み〴〵感じてゐました。

家に歸ると君からの手紙が着いてゐました。そして君の病症が、愈々不治のものと確定したといふことを知りました。

人間は、自分の病氣が、難症ではないかといふ、素人考へから起る豫想に脅かされると、早く醫師の診察を受けねばならぬと思ふよりも、却つて診察の結果を恐れて、それを廻避しようとする、不思議な、矛盾した感情をさへ感ずる程に、病を恐れる者です。それを今不治の難症だとの宣告を受けられた君の胸中が如何にあるかは、推察に餘りあります。

今日は雨です。窓から見る藻岩は冷たい色に烟つてゐます。不治の病を抱いて、病床に横はつて居られる君を思ふと、雲烟百里を心は越えて、君の姿がまざ〴〵心眼に浮びます。人生の寂しさが身に泌んで、私はたまらない心持になります。神なくしては堪へられない心持です。今はただ、神による光明が、君の病床を麗らかに包むであらうことを祈る心で胸が一ぱいです。

二

私は安價な氣休めを言ふことを欲しません。だが「不治」といふ醫師の宣告に絶望して、肉身の恢復を絶對的に不可能だと考へて了ふことは間違ひだと思ひます。醫師の宣告は、要するに「今日の醫術」では治癒が不可能だと謂ふまでゞあるべきです。未だ人間の醫學が絶對的のものでない限り、何んな超醫學的經過、現象があり得ないと言へませうか。私の知人中にも、醫師から見放された病氣が治癒した經驗を持つてゐる者は、一人や二人でありません。

斯く言へばとて私は今日の醫術を輕んぜよといふのではありません。更に況んや萬一の僥倖を賴みにして生きよ、といふのではありません。私は君が凡てを神意に委ねて、人力の限りを盡しつゝ、靜かに天意を待つだけの餘裕を心に

持ってほしいと思ふのであります。

洵に人間の生命は、人間の力で計られるものではありません。今「不治」の病に病臥して居られる君よりも、私の方が長命するであらう事を、誰が保證することが出來ますか。今宵にも私が死なゝいとは決して言はれないのです。凡ての人間は、常に死に直面してゐます。死の一點のみから見るなら、萬人はみな「不治」症患者です。早晩必ず死ぬべき者と決定してゐるのです。「不治」は君一人の問題ではないのです。

げに我等は早晩死ぬべき者です。我等は此の大事實に對して、自己の感覺を誤魔化してはなりません。併し同時に、我等の生命の眞の支配者である神の聖旨でないなら、一脈の生命も涸れるもので無いといふ信念をも確實に把持すべきです。私は信じます、天父の御許しが無いなら、一羽の雀と雖も決して地に落ちるものでないと同時に、若し神の御旨であるなら、王城の鐵扉も、死の使

を阻止することは出來ないといふ事を。神戸で貧民傳道に從事してゐる友人のKが、曾て自分の所で世話をしてゐる無賴漢に毆打されて、負傷したことがありました。その時、急を聞いて驅けつけたKの友人のHが、その男を警察に渡して了ったら宜いだらうとすゝめますと、疼痛と熱發とで呻吟してゐるKは「そんな馬鹿な事が出來るか。僕は基督者だ」と色を爲して答へました。Hが、でも將來君の生命に何んな危險が起るかも計られないではないか、と押して言ふと、Kは眼に涙を浮べながら、「君、僕の生命は神の御手にあるのだ。神の御許しが無い限りは、百千の暴漢と雖も、僕を何うすることも出來ないのだ。同時に神の御旨であるなら、警察や軍隊が、何れ程保護をして呉れても、僕は死ななければならないのだ」と言つて、相變らずその暴漢を自宅で世話をしてゐました。私はKを偉いと思ひます。確かに彼は眞理の上にしつかりと立つてゐるのです。

M君。「人事を盡して天命を待つ」と言つた古人の言を、窮迫した心でゞはなく、大能の御手にうちまかせた、寛やかな、安んずるところある心を以て、味讀し得る者は福ひです。私は心から、君もその一人であり得んことを希ひます。

三

M君。私は今、君に生死の問題を神の御手に委ねて、それに超然たる心境を持たれるやうに御奬めしました。併しそれは「死」に無頓着であれといふ意味ではありません。生死の運命を神に委ねる事と、「死」に就て考へる事とは別です　私は君が、死の脅威を最も痛切に感覺せられるであらう今こそ「死」に就て思を凝らし、それに對する正しい心の態度を調整されるのに、最も好い機會であると思ふものです。

日本人ほど死を恐れない人種は無いと言ふ人があります。併し私はその反對

を考へてゐます。「四」と「死」と音が通じる所から「四」の字を忌み、父母や妻子の葬式ですら、之れを送り出した後では鹽を撒くのです。死に關しては七里結界、緣起でもないことを口にするなといふのです。之れが日本人の感情です。日本人が死に強いのは、死を恐れないからでなく、死を見る眼を強いて閉ぢて死を考へないやうにして、漸く取り繕つた度胸です。私はそんな度胸を輕蔑します。それは餘りに卑怯で、かつ不眞面目な態度です。人生にとつて、死ほど眞劍、嚴肅な事實が他にあるでせうか。平素にもつと死を諦視して、死が何物であるかを見詰め、その眞の姿を了解して、それに對する心を整へて置くことは「死すべき者」である我等にとつて、最も正しく、かつ剴切な態度であります。聖フランシスが信仰生活に這入つたのは、大病をして死に直面したからでありました。ルッターが修道院に這入つたのも、親友の死に驚いたが爲めだと傳說されてゐます。親鸞は夢に死期を告知されて、遂に法然に走りまし

た。彼等は何れも死を恐れたのです。私は豚の様に死を恐れないよりは、フランシスや親鸞のやうに死を恐れたいと思ふ者です。

扨て人間が死に直面した時に、最も痛烈に感ずるであらうことは、生に對する執着と、死に對する恐怖とであらねばならぬと思ひます。

何故人間は斯くも生に對して執着を感ずるのでせうか。麗かな日光と清新な大氣とに包まれて、花の色は見るに宜く、鳥の聲は聞くに宜く、地上の大方は住むに好適であります。況んや輓近に於ける自然科學のすばらしい發達は、人間の生活樣式を一變するに至りました。坐して語るに電話あり、出でては乘るに自動車あり、空を翔るに能く、水を潜るに自在に、南洋の西瓜を雪を眺めつつ東京で喰ひ、北海の冬景色を臺灣の客室に映寫して樂しみ、輕便、自由、安易、快適、生活の便宜はあらゆる方面に極められつゝあります。生きるといふことの興味は、過去の如何なる時代よりも、今日を勝れりと爲すべきでせう。

若し人が現代の物質文明に對して愛着を感ずるとするなら、それは一應無理の無いことです。

併し我等は、物質的條件に基づく、表面的な享樂に誤られてはなりません。小なりと雖も一國の城主、淨飯王の子に生れた悉達太子は、輕裘肥馬の生活に安んじ得ずして、雪山に世を遁れたではありませんか。今かりに、帝國ホテルの客となつて、榮華を極めた待遇を受けるとします。華麗の室、快適な設備、美食、珍果に不足する所もありますまい。まことに心地宜いことでせう。併しそれは一日か二日の感じです。一週間が十日となり、一月となつてごらんなさい、人は到底そんな表面的な、實質の空疎な、享樂生活に堪へられなくなります。そして月洩る庇、破れ疊、物質的には何んなに貧弱であつても、我が家こそ戀しく、懷かしく感じるでせう。其處には父母や、妻子や、弟妹の、心からなる愛が自分を待つてゐるからです。

謂ゆる物質文明といふものは、何んなにそれが華麗であり、巧妙であり、便利であり、爽快であつても、結局は五感の世界のものです。表皮一枚の下に這入れば、もう我等とは没交渉です。三越のショーウキンドーに何んな優美な織物が現れても、愛兒を亡つた母の心は、それで分厘も慰められる所はないのです。ラヂオや飛行機が、我等の内實な生活に何の交渉がありませう。

況んや物質文明の此の實質を見誤まつて、それが人生無上の價値であるかのやうに考へ、その追求の爲めに跛き爭ふところに、いふに忍びない慘劇が生じつゝあります。嫉妬、反噬、虚僞、陷穽、此の世の醜惡事の大方は、それによつて醞釀されてゐるものです。

住めばまた浮世なりけり餘所ながら眺めしまゝの山里もがな

物質的慾望からの鬪爭によつて生み出される、人間心の淺間しい醜態をまざまざ見せつけられては、誰か浮世が厭やにならずに居れませう。物質文明を阻

うことは誤りでせうが、之れを無上の價値のやうに愛着することは斷じて迷誤であります。

四

父母や、妻子や、弟妹に對する愛着の故に、死別を悲しむ心には、享樂生活に對する執着の故に、死を厭ふのとは違つて、人間心の奥秘に觸れた、深い理由があります。私はかゝる悲しみを誤りであるとする理由を知りません。併しイエスはその死の前夜、彼の死を豫覺して、悲歎に沈みつゝある弟子達を見て『汝らの中、たれも我に「何處にゆく」と問ふ者なし。唯だこれらの事を語りしによりて、憂なんぢらの心にみてり。』と宣給ひました。若し人間の死は、その全存在が虚無に歸することで無くて、此の世界から、第二の世界への移動を意味するものであり、既に先に行きし者も、後に殘れる者も、何時かは其處に相逢ふ筈のものであるなら、死別の意味が甚だ異なつたものになります。從

つて生に對する執着にも變化を生ずべき筈であります。

若し唯物論者の唱へる所が眞理であつて、人間の心靈は腦皮質に於ける一種の分泌作用であつたなら、肉身の死滅は、直ちに心靈の消滅を意味すべきであります。併し、道義を解し、情操に秀で、深い高い理智に眼覺めた、此の人間の心靈が、土や石と同一物質であつて、その他の何物でもないといふやうな議論は、餘程執へられた者で無い限り、何うして承服することが出來ませう。しかも果して人間の心靈が、物質以上の存在であるなら、肉身の死滅は卽ち心靈の消滅であるとする論程には、大きな陷沒が生じます。靈魂不滅の信仰は純理に立つて考へても、道理の無いことではないのです。併し、不死の問題の本質は、我等基督者にとつては、キリスト・イエスによる直覺であり、信念であります。それは言詮を絶した確信であります。キリスト・イエスを諦視するがよろしい。その天上の輝に充ちた、仰ぐも尊い聖高の心に、誰か無限感を感

得せずに居れませう。それは滅することのあり得べからざる姿です。げに彼の生命には、有限、無限の境を絶した、或るものが輝いてゐるのです。彼を中心として天地を見る時は、地は當然に永遠の世界の前庭にすぎないのです。死の彼方の世界の實在、――それはキリスト・イエスを仰ぎ見る心に、顯然として直覺せられる知識であります。

私が地上に於て所有し得た、信仰上の竹馬の友ともいふべき二人の親友が、五年前に、約六ヶ月を隔てゝ、相前後して世を去つて了ひました。一人は「イエスは何んなお顏をしてゐらっしやるだらう」と言つて瞑目し、一人は「今死んだらイエスと同齡だ」と言つて瞑目しました。彼等は不死を白日のやうに確信して、厘毫の懷疑もなく、此の世を去つたのです。何れも三十代の少壯者でありましたから、必ずしも平素に死の用意をしてゐたわけでもありませんでした。併し死期が接近するにつれ、次第に不死の信念が鮮明になつて來て、死の

間際には、最早やそれは信念ではなく、確實、必然の事實として、彼等の心に輝いてゐました。彼等の肉身の衰弱、凋落してゆくにつれ、その心靈に輝き出た此の不死の確信は、單なる人間的要求から生れた幻影と見るには餘りに嚴肅深邃な事實です。私は人間心靈の此の神秘な確信に、哲學、科學を超出した、尊貴な眞理を感得する者です。

私が、その聖者のやうな人格の故に、衷心の敬慕を捧げてゐる、H博士といふ老宣教師があります。彼は今もなほ健在で、その四十餘年の傳道地である和歌山市に現に老後の餘生を養はれつゝあります。私が和歌山教會に牧師であつた頃の一日、紀三井寺へ傳道に行つての歸るさでありました。その夜は餘りに月が美しかつたので、殊更に電車に乘らずに、人影絶えた和歌浦の長橋を、徒歩しながら、H博士と信仰談をしつゝ歸つて來ました。見渡せば、月に磨ける玉津島には淡煙長く棚引いて、汐は觀潮閣の高欄に迫り、田鶴鳴くと詠ぜられ

し蘆邊あたりは、さながら夢幻の境のやうです。月の光も、汐する入江も、靜かに更けゆく夜も、はた此の風光に包まれた白髮、童顏の老教師の姿も、凡て永遠を思はすものがありました。私はH博士に、「貴下は、年一年と迫つて來る死を何うお考へですか」と問ひました。博士は面を上げて天の一方を見詰めながら、深い靜かな聲で答へられました。「私は死といふ事を考へません。唯だ此の世から彼の世に移る時が近づいて來ることを感じます」と。——私は此の時ほど來世の光明に打たれたことはありませんでした。

五

父母や、妻子や、弟妹との別離には、我なき後の彼等の生涯を懸念する心の苦惱があります。別して我等無產階級者にとつては、此の懸念は痛切です。

併しM君、我等は我等の家族の生活の爲めに、果して何れだけの部分を負擔してゐるでせうか。なる程我等は一家の主人として、彼等の全存在を支へてゐ

るやうにも思はれます。併し靜かに考へてみるなら、全存在は愚か、彼等の爲めの米の一粒をさへ、天地の惠みによらずしては、我等には何うしてみやうも無いのです。一滴の水、一粒の米に、或は嬰兒の爲めに備へられた母の乳房に、籠つてゐる深い智慧を、成心の無い純な心で眺めてごらんなさい。誰か天地の慈愛の深長を疑ふことが出來ませう。洵に天地こそは彼等の眞の扶養者なのです。此の事實は、啻に土が產む物のみから觀取すべきでありません。嬰兒の爲めには生命を賭して悔ひない母の心にも、父母なき小兒の曾て飢ゑた例の無い人間の社會にも、それを感得すべき筈です。

『空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天の父は、これを養ひたまふ。汝らは之れよりも遙かに優るゝ者ならずや。汝らの中たれか思ひ煩ひて身の長一尺を加へ得んや。又なにゆゑ衣のことを思ひ煩ふや。野の百合は如何にして育つかを思へ、勞せず、紡がざるなり。然れど我なんぢらに告

ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服裝この花の一つにも及かざりき。今日ありて明日、爐に投げ入れらるゝ野の草をも、神はかく裝ひ給へば、まして汝らをや、あゝ信仰うすき者よ。』とはイエスの言であります。教會に傳へられてゐる傳說や、その他の事柄を綜合すると、彼は未だ二十歲にならぬ時に父ヨセフを失ひ給うたやうです。貧寒な工匠の長子に生れ、老母と四人の弟と、尠くとも二人はあつた妹とに、自分を合せて八人の家族を、二十歲に足らぬ身を以て支へねばならなんだ生活は辛酸の多いものであつたらうことは察するに餘りあります。しかもそのイエスの言です。神に對する絕對の信賴がナザレの生涯中に成熟したものであることを思ふなら、イエスの此の敎の根柢には、血と涙とを以て味識し給うた、尊い體驗のあることを知ることが出來ます。イエスの神は、また我等の神です。我等はイエスの如く信じ、イエスの如く安んじたいものであります。

無論故なく天地の扶養に依頼して、親たるの勤勞を怠ることの誤りであることは言ふまでもありません。併し我等の力の及び得ない、運命の苦杯に餘義なくされて、愛する者等の將來を、天地の慈悲に委ねつくすことは、人間に許された道であらねばなりますまい。我等は凡ての人間の眞の扶養者である天父の大能に信頼して、迷はず、疑はず、彼等をその御手に托すべきです。若しひとへに、彼等の將來を懸念して、大能の指導に信頼する所が無いなら、百年、二百年をながらへて、彼等を墳墓に見送つても、なほ我等の懸念は止まないでせう。

私の友人で、現に不治の病を山形縣のその故郷で養ひつゝある、信仰の篤いT君といふのが、曾て佐渡ケ島で、中學校に教鞭を執りながら、病を養ひつゝあつた頃に、斯んな話を私にしたことがあります——。

昨夜私は斯んな夢を見ました。私は山形縣の郷里に、東京から歸省する途中

でありました。私の町の在る平野に這入る手前に、一寸した峠があります。私はその峠の絶頂まで來た時に、餘り暑くて汗が出たので、肌を脱いで汗を拭きました。そして好い氣持ちになつて峠を下り盡した時、ふと氣が附くと、東京で買つて來た土産物を、うつかり峠の絶頂に忘れて來たではありませんか。さあ失敗つた、と思ふと、取返しのつかない大失策をしたやうに感じられるのです。私はゐても立つても居れないやうな心持がして、しきりに煩悶してゐる中に、眼が覺めました。覺めて靜かに考へてみると、土産物を峠に忘れたといふやうな、くだらない事に、何故あのやうに煩悶したのかと、我ながら恥かしく感ぜられて、獨り床の中で赤面しました。そしてつくづく考へました。我等が此の世を去つて、死の彼方の世界に眼覺めた時、此の世にありし日のことを思ひ返して、何故まああんなくだらん事に、心配したり、煩悶したり爲たのだらうと、恥かしく感じるのではあるまいか、と。

M君。私がTから此の話を聽いたのは、今から十五年前のことです。その時私は、此の一場の感想談に、忘れられない教訓を感じて、十五年後の今日までも、それを心に抱いてゐるのです。憂ひ繁き人の世の夢から、死の彼方に目覺めた時に、自ら省みて耻ぢないやうに、晴朗な眼を持ちたいものだと思ひます。

六

私は小學校の尋常四年の時に腹膜を患つて、二ヶ年間も休學したやうな身體の持主です。幸ひ近年は壯健になりまして、此の數年は病氣らしい病氣もせずに暮してゐますが、病氣といふものに就てはかなり經驗を持つてゐます。從つて君が今、病床で嘗められつゝある苦痛が、何んなものであらうかは、わかるつもりです。

私は君が、その肉體に感じて居られる病苦と、病氣に伴ふ種々な家庭の問題から來る心勞とに、何んなに惱んで居られるであらうかを思ふと、心が暗くな

るやうに感じます。局部の疼痛や、呼吸の逼迫、或は熱發に伴ふ名狀し難い倦怠の苦痛、その他樣々な苦痛が、夜となく日となく襲うて來て、次第にそれが烈しうこそなれ、輕減してゆく模樣が少しも見えないやうな時は、實にたまらないものがあります。君も定めし忍耐を試みられて居られることでせう。それは實に辛いことです。私は此の試練の時に、君を支へて强からしめる上よりの力を、ひたすら祈つて止みません。

私の一友人が、その十五歲になる男の兒を死なした時に、病苦に苦しむ息子の手を握りながら、「お前は苦しくても、お父さんやお母さんに、身體を擦つたり、手を握つたりしてもらふことが出來るから幸ひだ。エス樣は、十字架のあのお苦しみの時に、お母さんのマリヤの姿を見ながら、片手一つ差し出すこともお出來なさらなかつたのだ」と勵ました、といふことを聞きまして、覺えず暗涙を催しました。

M君。幼稚な奬めのやうですが、君の長い病苦の間に、若し堪へられないやうな心持が起つた場合は、此の友人の、その子に對する勵ましを思ひ出して下さい。キリスト・イエスが、失はれた者等に對する愛の故に嘗め給うた苦痛を思ひ浮べる事は、――別してその最極度であつた十字架の苦痛を思ひ浮べることは、――我等彼の徒にとつて、限り知られぬ激勵です。

併し肉體の苦痛はなほ堪ふべしとしても、病に伴ふ種々な、そして複雜な家庭關係の問題になりますと、それが心の生活に喰ひ入つて來る事柄であり、かつ關係する所が全家族、若しくはそれ以上にも及ぶ場合が多いだけに、苦惱が一層深刻です。病苦に呻吟する身でもつて、之れらの複雜な問題に應接して、その苦惱をも忍受するには、實に英雄の心を必要とします。若し暗い、或は弱い心を以て之れに對するなら、人世が呪はしく感ぜられて、自暴自棄にもなりませう。

併しM君、我等は人世を信じたいと思ひます。其處には何んな悲しい、傷ましい事實が現在してゐるにしても、なほそれは神の愛の世界です。イエスの地上三十三年の生涯は、洵に苦惱に滿ちてゐました。『狐は穴あり空の鳥は塒あり、然れど人の子は枕する所なし。』とは彼が自らの境遇を、自ら感ずるがまもに表白し給うた言です。別してその死は、あの凄慘な十字架でした。しかもイエスはなほ神の愛を信じて微動だもせず、その御懷ろに歸らむことを希うて『父よ、わが靈を御手にゆだぬ。』と言ふて息絶え給うたのです。

若し人間生存の究竟の目的が、生活の享樂にあるものなら、イエスこそは古往今來、最も薄幸でした。そのベツレヘムの馬槽に始まつて、ゴルゴダの十字架に了つた生涯には、幸福らしいものゝ跡方も無かつたのです。あゝ併し、誰か惠まれた者にして、イエスの如きが世にありませうか。彼を孕んだ女をさへ、『めでたし、惠まるゝ者よ』と神の使が頌めたと聖書は傳へてゐるのです。そ

してそれを讀む何人でもが、――神を信じない者ですら――洵にさうだと、殆んど本能的に感ぜずには居れないのです。人間生存の究竟の意義が、そしてまた人間心の究竟の願望が、享樂に無いことは此の事によつても知るに足ると思ひます。

然らば人生の意義は何にあるのでせうか。私はイエスの『汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。』との教に、人間生存の最大理由を感得する者です。換言すれば、此の人世を靈魂修養の道場と觀、人生の目的を、自己を靈的完成にありと信ずる者です。此の見地に立脚して初めてキリスト・イエスの出生に意義は生じ、價値は生じます。私は、人生に苦痛の存在する理由も、此の立脚地に立つて、初めて理解されることを感じます。

パウロは患難の意義を、最も能く理解した人でした。彼はその『勞し、苦しみ、しばしば眠らず、飢ゑ渴き、しばしば斷食し、凍え、裸なりし』慘澹たる

受難の生涯の裡にあつて、『患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ず』ることを教へ、我は『患難をも喜ぶ』とさへ言つてゐます。確かに患難は教育です。之れを柔順な、素直な心で迎へるなら、尊い心の芽ぐみ出る、貴重な機緣を爲すものです。

M君。病苦の故に、現に深痛な苦惱の中に居られる君に、奬めようとするには、餘りに切ない心持がしますが、それでも私は敢て奬めます、何うかパウロがあつたやうに、患難を自己練達の機會として、之れを忌まず、厭はずに迎へて下さい。そしてそれが齎すであらう、天上の富を、パウロと共に喜ぶ者となつて下さい。

それには祈が唯一の道です。パウロを始め世々の聖者等が、忍苦の力の唯一の秘密は、實に祈にありました。あらゆる「自我」を祈の中に克服して、愛と忍受の力とをイエスによつて得て下さい。

七

カントはその「實踐理性批判」の結語に、「それを考へること屢々にして、且つ長ければ長きほど、常に新たにして、增し來る感歎と崇敬とを以て心を充たすものが二つある。それはわが上なる星の輝く空と、わが衷なる道德律とである」と言つてゐます。私はケーニヒスベルヒの哲人の、此の有名な言葉に於て、理智に透徹した心をしも、肅然として感服せしめる、之れらの神祕な力を見て、敬虔なる感動を禁じ得ないものです。

洵に人心の奥底には、「神聖心」とも名附けるべき、敬虔、嚴肅な心が潛んでゐます。それは宗教的には、神に對する憧憬、渴仰、止むことの出來ない情であり、道德的には正義、純潔に對して忠誠、僞ることの出來ない志です。人は此の心に忠誠である時に、明るい、輝いた心になり、生命の暢達を感じます。若しその爲めに迫害を蒙り、苦難に逢ふやうなことがあつても、その苦難の中

に、却つて深い歡喜と滿足とを經驗します。然るにその反對に之れを裏切るなら、彼の魂はたちまち苦痛と悔恨とに襲はれて、自己の生命が萎縮する事を感じます。

宇宙の目的、人生の意義――それは深い秘密であります。我等は此の疑題に對して立つ時に、固く閉ざされた神祕の鐵扉の前に立つた、嬰兒のやうな感をします。併し我等の衷に宿る此の「神聖心」の指さす所を靜かに諦視するなら洵にキリスト・イエスの敎へ給へるやうに、此の世界は我等が『天の父の全きが如く全からん』爲めの敎育場であり、神人父子の靈交を開拓するが爲めの家庭であることが、そゞろに感得されます。斯くして人生のあらゆる困苦は、我等を訓練し、敎養するが爲めの機會として、深長な意義を生じます。もとよりそれは理解といふよりは信念といふ方が正しいでせう。さもあれ神人イエスが、その全生命を以て確證し給うた眞理です。我等にして、彼の權威に信賴し、

一切の自己を空うして敬虔、柔順に此の眞理を承服するなら、平和と歡喜との新しい天地は、我等の前に展開し初めます。より高き宇宙の目的は第二の世界に於て、我等に啓示される事でせう。地にある日の靈魂の巡禮はイエスによつて示された此の道を、謙虚な、小兒の心を以て辿つて行くことにあります。

人間の世界が、享樂主義者の言ふやうに、感覺的な快樂の享樂を目的とする舞臺であるなら、貧寒な生活を送つてゐる、此の世の最大多數者や、別して不治の病に病臥してゐる人々の如きは、あるに效なきものです。併し若し、此の世界が、人間の心靈を教養する爲めの神の工場であり、學校であるなら、そして地にある日の我等の生活は、來らんとする第二の世界への準備であるなら、我等の存在に全く新しい意義と價値とが生じて、君の寂しい病床にも、私の貧しい軒端にも、新しい光明が靜かにさし入ることを感ずるではありませんか。

げにキリスト・イエスは彼に從ふ徒に、『人もし我に從ひ來らんと思はば、

己をすて、己が十字架を負ひて我に從へ。己が生命を救はんと思ふ者は、これを失ひ、我が爲めにまた福音の爲めに己が生命をうしなふ者は、之れを救はん。』と敎へ給ひました。神に對してする絶對の自己否定は、やがて絶對の自己肯定です。我等はイエスを信じたいと思ひます。そしてイエスが指示し給ふ、被造者の道を、敬虔な柔順を以て歩みたいと思ひます。

M君。私は今、君にカアライルのサーターレザータスにある、かの有名な言葉「歡樂を愛する勿れ、神を愛せよ。是れ永遠の肯定なり。」を思ひ浮べてほしいと思ひます。

言ふべきことが、なほ多くあるやうです。併し既に、かなりに紙數を重ねました。後日に改めてペンを執りたいと思ひます。君の病床に神による平和のあらんことを。

（一九二四、一〇）

――終――

昭和七年九月七日改版印刷
昭和七年九月十日發行

札幌パンフレットⅡ
苦難の理解 奥付
【定價金貳拾錢】

著者 札幌市北一、西六、 小野村林藏

發行者 東京市牛込區早稲田鶴卷町四七一番地 長崎次郎

印刷者 東京市牛込區早稲田鶴卷町四四二番地 横澤藤盛

印刷所 明正社印刷所

發行所 東京市牛込區早稲田鶴卷町四七一 長崎書店
振替東京七一八八六番

版權所有

長崎書店刊行

高倉德太郎著　恩寵と眞實　定價壹圓五拾錢　送料拾貳錢

高倉德太郎著　福音的基督教　上製定價壹圓　普及版定價貳圓

高倉德太郎著　基督教世界觀　上製定價金壹圓拾錢　送料　普及版定價金六拾錢

高倉德太郎說教集　第一輯　神の愛と神への愛　上製定價壹圓　普及版定價五十錢

高倉德太郎說教集　第二輯　祈禱の戰場　定價壹圓　送料拾錢

高倉德太郎說教集　第三輯　決斷的信仰　定價壹圓　送料八錢

小野村林藏著　土に芽ぐむ生命　定價壹圓六拾錢　送料拾貳錢

征矢野晃雄著　聖アウグスチヌスの研究　定價貳圓五拾錢　送料拾六錢

東京市早稲田大學正門前
振替東京七一八八六番

長崎書店刊行

征矢野晃雄著　信仰と道德　定價貳圓　送料拾四錢

中川景輝著　ロマ書の精神　定價壹圓五拾錢　送料拾錢

山谷省吾著　テサロニケ前後書　ガラテヤ書　定價壹圓四拾錢　送料拾錢

新譯と解釋　コリント前書　定價壹圓五拾錢　送料拾錢

淺野順一著　豫言者の研究　上製一、五〇（郵・一三）　普製一、〇〇（郵・一〇）

ジョン・ベイリー著　桑田秀延譯　基督教の中心問題　上製二、〇〇（郵・一四）　普製一、五〇（郵・一三）

東京市早稲田大學正門前
振替東京七一八八六番

長崎書店刊行

春山作樹編　王朝教育史資料　定價壹圓　送料四錢

武藏野歌會編　東雲のまぶた　定價五拾錢　送料六錢

全生病院兒童詩文集　星影　定價參拾錢　送料四錢

白石天羽子熊倉双葉編　雜林　定價參拾錢　送料四錢

村尾圭介著　療養夜話　定價壹圓貳拾錢　送料拾錢

東京市早稲田大學正門前
振替東京一七八八六番

高倉德太郎著

傳道用パンフレット　第一輯　I—V　各四六版定價十錢　四八頁內外　送料二錢

(I) 活ける神　(II) 聖愛に應へて
(III) 祈の本義　(IV) 壯嚴なる神秘
(V) 神の言としての聖書

福音と現代パンフレット　第一輯

(I) 宗教に就いて
(II) 基督教の神

小野村林藏著

札幌パンフレット

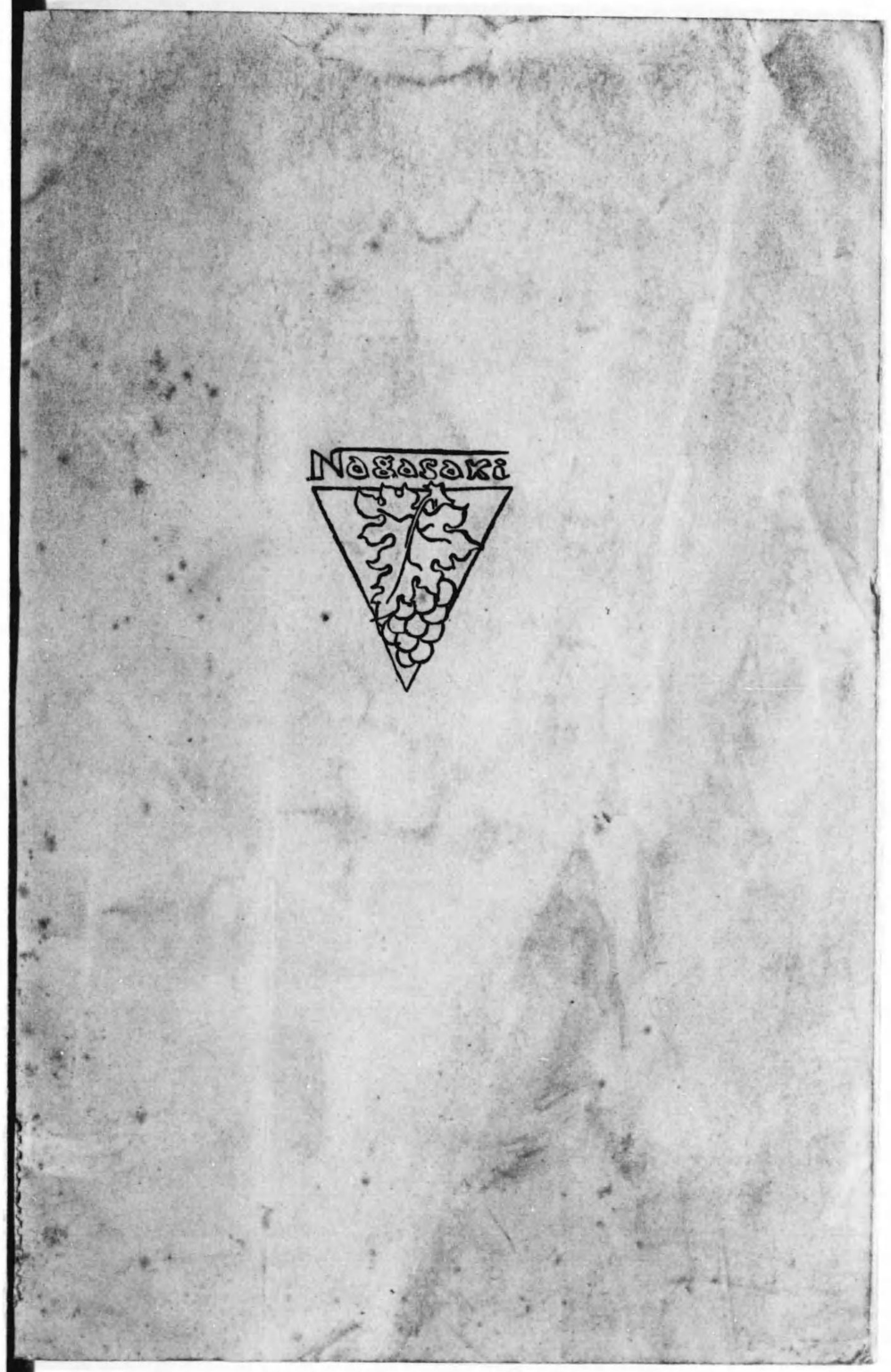
今回當店にて出版を引受けるに當り訂正改版して、世にまみゆることゝした。
倍舊の御利用を乞ふ。

拾　部以上壹割引
參拾部以上貳割引
五拾部以上參割引
（別料送）

新刊　苦難の理解　四六版假綴　約七〇頁總ルビ付　定價貳拾錢　送料貳錢

近刊　神を求むる人へ　四六版假綴　約七〇頁總ルビ付　定價貳拾錢　送料貳錢

近刊　奇蹟の理解　四六版假綴　約　頁總ルビ付　定價貳拾錢　送料貳錢

近刊　地にありし日のイエス　四六版假綴　約九〇頁　定價參拾錢　送料四錢

終